

海峡物語（激闘編）

プロローグ

今回の話は、昨年、青函ヨットレースから始まる。私はMORCが誇る「銀河」に乗せてもらっていたのだが、青森をスタートして陸奥湾を進むうち、小樽から来た「オーシャンボーイ」が、断然トップの走りで視界から消えて行った。何のこっちゃと言われる読者も居られると思うが、このレースで数回の優勝を誇る名門の船は、何と私が震災後1年を経て手に入れたものと判で押したように同じ船なのである。もう少し詳しく言えば、判で押したように同じでなければルール違反なのである。どんどん他艇を離して行くかの船を見送る私の心はつぶやいていた。「イヤー俺の船は本当は速い船なんだなあ。（どうして自分の船は遅いんだろう）」

答えは当然私の腕が悪いからに決まっているのだが、それで済むなら世の中に煩惱と言うものが存在する筈が無い。

以来私の頭の中は、なんとかしてあの船と同じ海面で走ってみたいという願いで一杯になったのである。しかし今年出たって船を替えられてはどうにもならない。そこでネットで探したクルー募集のページから、お伺いを立ててみたところ、「去年の船で雪辱の予定。一緒に走るのを楽しみにしています。」と暖かい言葉を頂いた。これで安心して船を函館に持って行ける。

しかしですよ、折角挑戦状を叩き付けたとは言いながら、冷静に考えてみれば、我が船は地元のレースですら目下最下位を独走しており、このままでは折角待っていてくれるオーシャンボーイに「こりゃ、どーゆーこと？」と呆れられるだろうな。とにかくクヨクヨ悩んでいても仕方が無い。後でごめんなさいすればいい。と言う心境で小浜を出港したのである。

台風通過と月の砂漠

折しも台風8号が東北南部を通過。時間があれば回航を1日遅らせるところだが、まだうねりと吹き返しの残る中、小浜を出港した。金華水道を過ぎると波は穏やかとなり、満月の登場、風は西風のため三陸名物の霧も出ない。まるで街灯付きの夜道をゆくが如くでつつい「月の砂漠をはるばると」などとメールしてしまった。これほど天候に恵まれた順調な航海はなかった。

函館山の吹き下ろしと海峡横断

開会式と前夜祭は残念ながら出られなかった。出られなかったどころかオーナーは乗った後で実はこの列車が、今日中に函館に着く最終だったと気づいたような訳で、乗り遅れたら、チームに何と思われたか。下手くそヘルムが居なくなって丁度良いわいと？

被害妄想は止めよう。今回のテーマは東風。港を出たところは、函館山のすぐ麓である。一流の艇の皆さんはズッと先の風を確かめて帰って来たが、中でも目を引いたのが、キホミニ（Pogo 2）だった。小さいながら、美しい走りで、さすが西太平洋横断レース、トランスパック、クラス2位のチームの貫禄を見たような気がした。かなり吹いたためか、ヤジも怒号も無い意外に閑散としたトップグループでのスタートだった。函館山の吹き下ろしは強さも方向もめまぐるしく変わり、非常に忙しかった。不用意に落とさない事に注意しながら走っていると、艇団の東端に位置することになった。我々よりもスピードで勝ったベネトウ407などトップ艇は下の方、津軽半島寄りを選択したようだった。どっちが強く吹いているかなど私には分からなかったが、いずれも風があったため、あっという間に川「津軽海流」を渡ってしまった。潮流をどう利用するかなどと言う作戦は、今回は吹っ飛んでしまった。

恐山下ろし

斧のような下北半島の刃の部分南下する我々は、基本の東風が、恐山を回って、あるいはこれに当たって吹き下ろす風に翻弄されていた。我々より（風）上に居るのはクロコダイル・ダンディー（エリオット10.5）で、お互いに、超微風やブローを繰り返すたびに、先に出たり抜かれたりしていた。風向きも色々で、ラットを握る私は、なるほど、吹きおろしと言うのはこう言うものかと遥かに続く断崖を眺めながら一人で納得していた。函館山の時は、これの規模の小さい奴だったかと思う。この集団がトップで居られるのは、下北エクスプレスに乗れたか、あるいは吹き下ろしを、翻弄されたにしても利用できたからかであろうと思う。

しっこいライバル

その当時、我が僚艇「月光急行」は、しっかりと先行艇を視野にとらえ、ブローのためヒールしたり、カームのため直立したりしている我々をみて「KAYA立った。KAYA寝た。」などと風の情報をつかんでいた。トップ艇団は、ましてや普段地元でぼろぼろに踏みつぶしている船が前を走っていると言う事はあそこの条件がよほど有利なのに違いないという推論はさすがで、関西弁で言う「ひっこいやっちゃ」。もっとも函館山ではX-35を下突破していたようだから、実力も艇長自ら語っていたように「何しろディフェンディング・チャンピオン」なのは間違いない。

疾風怒濤

下北の後半、吹き上がったと見るやとどまるどころを知らず、あっという間に波頭が吹っ飛び始め、40ノットを超える大嵐となった。それまで軽風用のジブを上げていたところ、強風用4番に替えたがジブハリヤードが飛んでしまい、たまたまピンハリでストームジブを上げたが、ハリヤードがタブラフの溝にはまり込んでしまい（こんな事あるのか？）これも使えなくなって、結局リーフしたメインだけで走らざるを得なくなった。マストから前をやっていた伊藤さんの両足がツッてしまい、船倉へ。ともかくひたすら耐えていたが、引き離していたクロコダイル・ダンディーが、強風用ジブを上げて我々を追い抜いて行った。悔しいがどうしようもない。定番の平館の無風など全くどこの話だと言わんばかりの大暴風で、このまま万事休すかと諦めかけていたのだった。

最後の奮戦

しかし、メイントリマー田村さんの「少しでも風が落ちたらもう一度4番上げましょう。」の一声が、我々の士気を鼓舞したのだった。残ったハリヤードはと言えば、ポールリフトしかない。本当にほんのわずか風が落ちたところで4番が再度上がった。あとは必死に追いかけたが、江口さんの「先行艇と同じコースでは勝ち目ありませんよ。」の声に、GPSでフィニッシュポイントを見ると、先行艇は少し落とすぎているようだった。我々は最適コースを目指し、少し追いついたようだったが何とも分からない。無我夢中で、明るいうちに着順2位でゴールした事だけは分かった。日付の変わらないうちに全艇がフィニッシュしたのはこのレース始まって以来だったと聞いたのは後ほどの事だった。皆それぞれに大変な思いをした筈で、表彰式では「良い風」を戦った全艇のメンバーに、キスマでなくても肩を叩いて回りたいくらいだった。

ファーストホームのクロコダイル・ダンディーとKAYAだけが19時前に入港することができ、後続艇は港が閉鎖されたために海上で頭上に上がる花火を、我々は

それを接岸して見物できたことになる。もっとも港に入った我々は火がセイルに燃え移らないか気が気でなく、お祝い気分にはなれなかった。でもよく走った。技術顧問の江口さんを始め、ド強風の中、レースをあきらめなかったクルーに本当に教わる事は多かった。

エピローグ

青森で一番素晴らしい季節（この季節しか知らない）。我々を迎えたのは2週間後に控えたねぶたのお囃子の稽古。年に一度炸裂しようとする喜びのリズムは何度も来ていると懐かしささえ感じる。

その晩探し当てた昨年の津軽情緒あふれる居酒屋「大久」。我々は例の痩せ細った大黒様に金の打ち出の小槌でたたいてもらったのだが、彼も勤務時間があるらしく、ムーンライトの一行が到着した時には退社してしまっていた。あとで思えば、これが優勝と第3位を分けた運の尽きかもしれない。

「いやあ、ひょっとしたらひょっとするね。それにしても」と鈴木艇長。「普段小浜では何であんなに遅いんだい？」

「、、、、、、、、（・・;）」

小浜の皆さん、常に全力投球のKAYAとまた遊んで下さいね。